

文学の本領について ——21世紀の劇場封鎖

島 高 行

このたび、実践女子大学の英文学科は100周年を迎えることができました。これまで英文学科に関わってこられた多くの先人の方々のおかげと、感謝申し上げます。ただ英文学のみならず、文学全体に対する社会一般の評価を考えると、今は決して楽観できる状況ではありません。今回の講演では、そうした現状にかんがみて、文学の価値とは何だろうかということをあらためて考えてみたいと思います。

まず「文学の本領について」という、かなり大げさなタイトルについてご説明します。これは、ある有名な軍事研究家のSNS 上でのやり取りに基づく題名です。そこでは「文学部には価値がない」という投稿に対し、「価値がなくなったあたりからが、文学部の本領発揮ではないだろうか」という応答がなされていました。「今さら文学なんて」ということを日々聞かされている身としては、文学の専門家ではない方の指摘だけに、大いに励まされる思いをしたものです。とはいっても、では文学部の、そして文学の本領とは何だろうかという点については残念ながら明らかにしてくれていません。そこで「文学の本領」についての答えを自分なりに探っていきたい、というのが今回の講演の趣旨です。その手がかりになるのが、価値がなくなった時が「本領発揮の時」という逆説的な表現であり、発想法になります。

1. 文学をめぐるつらい状況

現代は、文学だけでなく人文学全体に対して、厳しい視線を向けられている時代です。そのことを端的に表しているのが、文部科学省が新たに打ち出した、学習指導要領における「論理国語」と「文学国語」の分離でしょう。高等学校の選択科目として提案された「論理国語」について、要領では「実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする能力の育成を重視」と説明されています。そうすると「論理国語」から分離された「文学国語」

は実社会とは無関係で、論理的でも批判的でもない言語、ということになるのでしょうか。たしかに「文学的」という形容詞は、難解であいまい、そして感情表現に特化した文章という理解が一般的なものかもしれません。また効率性が最優先される現代社会では、主観的言語表現とは無縁の、「実践的」「実用的」な国語が必要だという主張に一理あることは認めざるをえません。

ではそこで想定されている「文学的」ではない「論理国語」とはどのような言語なのでしょうか。ここで参考にしたのが、「論理国語」が求める言葉とは「使いやすい道具のように安定した言葉」であり、「透明で明晰な文章」であるとの阿部公彦氏の指摘¹です。つまり「論理国語」が想定するあるべき言語の前提には、あいまいさを排除し、意味を間違いなく明確に伝えることができる文章を理想とするような言語観があるということです。

ところでいわゆる文学的表現を排除し、簡潔で明快な言語を求める志向性は現代日本にだけ見られるものではありません。17世紀イギリスでも、同じような動きが見られたということを次に紹介したいと思います。

2. 王立協会の言語改革

イギリスの16世紀後半から17世紀初頭にかけての時期は、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)の作品をはじめとする演劇の黄金時代でした。ところが17世紀半ばに起きた革命によって、事態は一変します。不道徳であるとして演劇を敵視していたピューリタンが政権の中枢を担った革命政府によってロンドンの劇場は封鎖され、シェイクスピアの本拠であったグローブ座も破壊されてしまいます。こうしてエリザベス朝演劇以来の、輝かしいイギリス演劇の伝統は徹底的につぶされたのでした。

その後、王政復古の時代になっても、文学に対する抑圧は続きます。その典型が王立協会による言語改革の運動です。ロバート・ボイル(Robert Boyle)など著名な科学者を中心メンバーとするこの組織は、観察と実験に基づく科学的方法を提唱し、近代科学の出発点となりました。中でも重視されたのが、観察と実験によって得られた結果を公開し、検証することでした。そのために必要とされたのが、客観的「事実」factを「データ」dataとして伝える、簡潔で明晰な言語でした²。そうした観点に立つと、シェイクスピアに代表される文学者の用いる多義的であいまいな表現は忌避されるべきものになります。特に表現と意味内容とが一致しない反語ironyや逆説paradoxは目の敵にされました。このように17世紀のイギリスと21世紀の日本という違いはあっても、あいまいな文学的言語に対する否定と、わかりやすい実用的言語の称揚という点で両者

に驚くべき類似性があることがわかります。

3. 『ヘンリー五世』の逆説表現

では文学的言語は本当に実用的ではなく、実社会において意味がないのでしょうか。シェイクスピアの歴史劇『ヘンリー五世』(*Henry V*) の一場面を紹介しながら、次に考えてみましょう。

この芝居の舞台は百年戦争の時代の中世フランス、ヘンリー五世率いるイギリス軍がフランス軍と対決する場面です。兵士の数でも装備の面でも圧倒的に不利な立場に置かれたイギリス軍は意気が揚がらず、母国からの援軍があればとイギリス人貴族たちが愚痴をこぼしているところにヘンリー五世が登場し、クリスピーアン・スピーチとして知られる有名な演説で味方を鼓舞します。味方の数が少ないことを、それだけ勝利した時の栄誉が増えるのだから喜ばしいではないかとヘンリー五世は主張し、全く新しい視点でこの苦境を好機へと読み替えてみせるのです。この立場を端的に示すのが“*We few, we happy few*”というセリフです。ヘンリー五世のこの言葉は、イギリス軍が直面する絶望的な状況を希望に満ちたものへと一変させるのでした。そして彼の演説によって戦意を高められたイギリス軍はフランス軍を打ち負かし、奇跡的な勝利を収めることになります（実際の戦闘ではイギリス軍の長弓の威力が大きかったようです）。

さて、ここで示されているのは、不利な状況こそが幸運だというヘンリー五世の逆説表現であり、こうしたレトリックを使った文学的表現が戦場で意気消沈した人々を実際に動かし、状況を変える力を持っているということです。言葉が人を動かし、苦しい状況を一変させる力があることを、『ヘンリー五世』のこの場面は見事に表現していると言えるでしょう。

4. まとめ

私たちは文学が置かれている状況が、決して楽観できないことを認識しています。またそうした状況は今に始まったことではなく、17世紀のイギリスにおいて、より過激な形で存在していたことも見てきました。しかし王立協会が主導する言語改革の運動は結局失敗に終わり、破壊されたグローブ座は現在ほぼ同じ場所に再建されていて、シェイクスピアの作品が上演されています。このように文学的なものが敵視される時代があっても、文学はそれを乗り越えてきました。また文学が必要とされない時代こそ、思いがけない視点を提供するこ

とができる文学特有の手法が必要とされるとも言えるでしょう。まさに文学が冷遇される時代こそ、文学の本領が発揮される時なのだという逆説的現実が成立するわけです。文学の教育・研究に関わる私たちは、現代社会において少数者であるかもしれません。しかしそのような逆風の時代であるからこそ、私たちはhappy fewであることの矜持を胸に、今こそ「本領発揮」の時であるとの自覚を持って、次の百年につなげていく努力を続けたいと願っております。

最後に、文学研究がまだまだ捨てたものではないという事例を紹介します。「文学離れ」ということが言われて久しいですが、オープンキャンパスや大学の教室で接する若い人の中に、驚くほど幅広く、また熱心に本を読んでいる文学好きの人が増えてきています（文学作品を題材にしたゲームの影響も強いようです）。また私自身、一般市民を対象としたジェームズ・ジョイス（James Joyce）の『ユリシーズ』（*Ulysses*）を読む読書会に参加させてもらった経験があり、そこでこの難解な作品を熱心に読み、議論する多くの人々と交流することができました。そこで「文学離れ」といっても、世の中にはまだまだ文学に対する熱意を持ち続けている人々が存在していることを実際に知ることができました。こうした目立たないけれども文学作品を求める人々が現代においても存在し続けていることを支えとして、今後とも英文学科が「文学の本領」と関わっていくことを願ってやみません。

注

1. 阿部公彦『文章は「形」から読む：ことばの魔術と出会うために』（集英社新書、2024年）。
2. この点については、高山宏『メデューサの知：アリス狩り3』（青土社、1987年）などを参照。

この文章は、2024年9月29日に実践女子大学で開催された英文科創設100周年記念講演に基づき、『英文科会だより2025』に掲載予定の講演記録に一部加筆したものです。講演会をご準備いただき、また転載をご許可くださった実践英文科会の皆様に感謝します。